

『捷解新語』による敬語の構文論的研究

—從屬節の陳述性の関わりについて—

朴 喜 南

一、はじめに

接続助詞は二つの節が結び付けられたとき、前の節の陳述と後ろの節の陳述との関係について話し手の認定を表す特色がある。

時枝誠記氏は、独自の「言語過程説」にもとづき、「言葉において、主體的なものの直接的な表現は辞によってなされるのであるから敬語の直接的表現は辞に属するものと考えなくてはならない。」と述べ、敬語論においても、敬意の直接的表現である「辞の敬語」と話題の人物に対する言語待遇を示す「詞の敬語」とに分けた。即ち、話題の人物を敬語の配慮対象とする尊敬語・謙讓語は「詞」的で、聞き手への敬意の直接的表現である丁寧語は「辞」的であると言えよう。

「文の成立」にもっとも関係が深い構文論の基本概念の一つである「陳述」は、一般に「主語・述語などの関係にある述語を、一つのまとまった文として成り立たせる作用で、言語主体の何らかの判断の態度がこれに反映する。」と定義されている。しかし、

文の成立に大きく関わりをもつ陳述について定説を得たとは言いがたく、文法論における論争の焦点になっている。

本稿では、陳述論に関する様々な説の中で、用言を陳述力の差によって、「より事柄的か、より陳述的か（文の完結力が十分か、不十分か）」と区別した渡辺実氏等の説に注目して論を展開していくことにする。

さて、17C朝鮮における日本語教科書であった『捷解新語』に現れる日本語は、朝鮮と日本の役人の交渉の対話と朝鮮使節来日時の両国人の対話を中心に書かれた話し言葉である。

そこで、本稿では、接続助詞で終わる從屬節の述語部に現れる敬語を調べることによって、敬語と接続助詞を関連付け、敬語に現れる陳述的成分を構文論的に考察する。

二、從屬節における敬語の分布実態

I 敬語の現れ方

『捷解新語』に用いられた日本語は、朝鮮と日本の役人の対話

を中心には書かれた敬語体の話し言葉である。それは話し言葉の文の特徴の一つとして、敬語がついてまわるといふことと、その内容が国家間の交渉であることを考えると当然のことと思う。

ここで、本稿の考察の対象になっている従属節（接続助詞で終わる）の述語として現れる敬語の現れ方をみると

(1) 丁寧語

〈動詞〉

ゴザル、ゴザリマスル。

〈補助動詞〉

テゴザル、テゴザリマスル。

〈助動詞〉

マルスル、マスル。

(2) 尊敬語

〈動詞〉

ゴザル（行く・来る・居るの意）、召ス、

〈御十用言〉

ナサル、オヂヤル、召サル。

〈御十用言〉

御ムツカシ、御カンジル。

〈助動詞〉

ル、ラル、サシラル、サッシャル。

(3) 謙譲語

〈動詞〉

マイル、モウス、イタス、存ズル、仕マツ

〈慣用的〉

ル、ウケタマワル、モウシアゲル。

〈慣用的〉

オ目ニカカル。

などが、敬語単独、あるいは二重敬語（尊敬語・謙譲語＋丁寧語）の形で従属節の述語部に現れる。

II 統計的な方法による考察

従属節の接続部が接続助詞であるものを用いて、従属節を構成

する述語部の敬語（丁寧語と尊敬語・謙譲語）の現れを調べることにした。述語を二つの側面（事柄的か陳述的か）からみる観点より、述語の陳述性と接続助詞の種類との関わりを考察してみることにする。

考察の方法は、述語部に現れる敬語を尊敬語・謙譲語（詞の敬語）と丁寧語（辞の敬語）に分けて統計的に調べてみると敬語が現れやすい接続助詞と現れにくい接続助詞など接続助詞の種類によって、その出現には差が出てくる。それをまとめてみると次の〈表〉の通りである。

(1) 原刊本

原刊本での従属節に現れる敬語の分布を統計的な方法で調べた結果、〈表1〉と〈表2〉のように、接続助詞別に敬語の出現には差があることが分かった。即ち、「ほどに」・「が」・「ども」は丁寧語が、「けれども」・「から」・「ほどに」・「でも」・「ども」・「ば」等は尊敬語・謙譲語がよく現れるのである。その用例は次のようである。

①が

明日東葉よつて、明後日の頃入_レまる_レせうが、何船何艘戻_リます_レるか。（巻四・7）

②けれども

如何様にも爲_レたいけれども、我等も代官の役なれば、何とも捌き難い様子でこそ御座る。（巻四・22）

〈原 刊 本〉

〈表 1〉

〈丁寧語〉

接続 助詞 現われ	て ¹	て ²	て ³	なが ら	て も	と も	ば	か ら	ほ どに	に よ り	ど も	け れ ど も	が
a		13	3		1	1	4		62		17		11
b		1	5			2	2		56		5	9	
c	2	50	26	6	13	8	27	3	75		23	1	10
d	5	42	92	4	13	3	21	2	49		35	1	13
従属節の 現われ		14 (13)	8 (7)		1 (3)	3 (21)	6 (11)		118 (49)		22 (28)		20 (47)
合 計	7	106	126	10	27	14	54	5	242		80	2	43

() %

- a 従属節と主節両方に丁寧語が現れる。
 b 従属節だけに丁寧語が現れる。
 c 主節だけに丁寧語が現れる。
 d 従属節と主節両方に丁寧語が現れない。

〈表 2〉

〈尊敬語・謙譲語〉

接続 助詞 現われ	て ¹	て ²	て ³	なが ら	て も	と も	ば	か ら	ほ どに	に よ り	ど も	け れ ど も	が
a	3	7	34	1	2	2	7		29		8	1	4
b		16	15	2	6	2	9	2	42		11		7
c	1	18	39	3		1	11	2	82		12		11
d	3	63	38	4	16	9	27	1	89		62	1	21
従属節の 現われ	3 (42)	23 (22)	49 (38)	3 (30)	8 (30)	4 (29)	16 (30)	2 (40)	71 (29)		19 (24)	1 (50)	11 (26)
合 計	7	106	126	10	27	14	54	5	242		80	2	43

注：() a、b、c、dは表1参照

③とも

代官は知られるしたれども、重ねて言うて行きまるせう。

(巻二・26)

④ほどに

彼からは来んと、皆腹を立てさしらる程に、一身では分けられず、迷惑で御座る。(巻一・13)

⑤から

祝わいんでは叶わん様に、先度より仰しらるから、ともかく御合點次第にこそ爲まるせうずれ。(巻八・25)

⑥は

正宮人出でられずば、我等無調法は申し分けられん。(巻

一・29)

⑦とも

仮令、我人差合有るとも、御振舞に反する事は、御座るまい。

(巻九・9)

⑧ても

東葉聞かしらりても、かど病とは思し召すまい。(巻一・31)

⑨て(継続的動作・状態)

東葉釜山浦に申して、方方へ彼方此方尋ねまるする。(巻

一・14)

⑩ながら(逆接)

代官衆も御存じながら、遂に勝手ばかり思わしらる事は、

(巻四・15)

⑪て(原因・理由)

さてさて殊の外の嵐に何事無う渡らしられて自立たうこそ御座れ。(巻一・10ウ)

⑫て(継続的な動作)

判事衆も同道さしられて御座れ。(巻一・2ウ)

(2) 改修本・重刊改修本

以上の結果、「原刊本」の場合「から」「けれども」「て」「等」用例の数に問題点がある部分を残したまま、三本「原刊本」・「改修本」・「重刊本」の「捷解新語」を比べてみると、接続助詞別に敬語の出現に差が見られる。「陳述的」な面からみると、接続助詞で終わる従属節には、「陳述性」の段階が異なるのである。従って、接続助詞別に現れる敬語の出現比率によって、接続助詞を次の三つのグループに分けることができる。

(A) グループ

①が

・軍官もさし御座れましたが、まいりましたか。(改・巻一・13ウ)

・拾束の請取になりまするが、判事衆如何思わしやるか。(重改・巻四・25)

②けれども

・さやうには申ませうけれども、いちどに三隻まではいかが御

〈改修・重刊改修本〉

〈表3〉

〈丁寧語〉

接続	て ¹	て ²	て ³	ながら	ても	とも	ば	から	ほどに	により	ども	けれど	が													
助詞	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修													
現われ	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修	改修													
a	2	1	61	65	28	24		6	9	4	2	27	16	6	5	99	58	37	32	37	39	12	10		16	
b	1	1	7		13	4		1		3	1	2	1	1		21	18	6	5	5	4	1	2	24	1	
c	5	7	42	24	61	55	4	2	21	11	4	4	17	5	4	1	17	6	7	2	5	3	2	2	4	
d	3	12	4	59	29		3	2	6	4	3	1	4	7	1		2	2	2		2	1				
従属節の	3	2	68	65	41	28		7	9	7	3	29	17	7	5	20	76	43	37	42	43	13	12	24	17	
現われ	(27):	(22):	(56):	(70):	(25):	(25):		(21):	(38):	(50):	(38):	(58):	(59):	(58):	(83):	(86):	(90):	(83):	(94):	(86):	(91):	(87):	(86):	(86):	(100):	
合計	11	9	122	93	161	112	7	4	34	24	14	8	50	29	12	6	39	84	52	39	49	47	15	14	28	17

注：()、a、b、c、dは表1参照

〈尊敬語・謙譲語〉

〈表4〉

接続 助詞 現われ	て ¹ 改修	て ² 改修	て ³ 改修	ながら 改修	ても 改修	とも 改修	ば 改修	から 改修	ほどに 改修	により 改修	ども 改修	けれど 改修	が 改修													
a	3	2	28	25	44	29	2	1	8	6	3	3	5	2		18	17	1	1	6	8	1	5	6	4	
b			16	15	35	21			7	3	1	1	7	5	5	1	27	9	7	8	13	8	6	4	6	2
c	5	4	23	15	37	30	4	2	6	10		1	16	8	2	2	63	25	12	14	9	7	2	3	6	5
d	3	3	55	38	45	32	1	1	13	5	10	3	22	14	5	3	31	33	32	16	21	24	6	2	10	6
従属節の 現われ	3	2	44	40	79	50	2	1	15	9	4	4	12	7	5	1	45	26	8	9	19	16	7	9	12	6
	(27):(22)	(36):(43)	(49):(44)	(29):(25)	(44):(38)	(29):(50)	(24):(24)	(42):(17)	(32):(31)	(16):(23)	(39):(34)	(47):(64)	(43):(36)													
合 計	11	9	22	93	161	112	7	4	34	24	14	8	50	29	12	6	39	84	52	39	49	47	15	14	28	17

注：()、a、b、c、dは表1参照

- 座ろうか。(改・巻四・14)
- ・手板にも御座りませうけれども、先早う知り度御座ります。(重改・巻五・14)
- ③ども
- ・代官中は知っていられますけれども、重ねてゆうておきませう。(改・巻二・23)
- ・順盃はいすみましたれども、あまり残多御座ります故、(重改・巻二・14)
- ④により
- ・おきにふねがみゆると申しますにより、さだめて二特送便がまいりませう。(改・巻一・13ウ)
- ・御饗応が御座ると申しますにより、左様におこころえなされて御ゆるりとなされませい。(重改・巻八・12)
- ⑤ほどに
- ・うちにいまるるほどに、みんな同道なされて御いてなされませい。(改・巻一・3ウ)

・明日より我々が始めませう程に、各も左様に御心得被成ませ
い。(重改・卷九・3ウ)

⑥から

・その日は天氣にもかまいなく出航なされませうから、さよう
に御こころえなされませい。(改・卷六・18)

・お目にかかるがれいて御座りますからまづさしひかえます
る。(重改・卷五・9)

(B)グループ

①ば

・誓契をみますれば、烏中御無事に御座ってちんちやうに御座
る。(改・卷二・4)

・おとりまするやうすをみますれば、うたのころは知りませ
ぬ。(重刊・卷六・11)

②とも

・かようにおおせらるるがわるう御座らぬとも、このほうもひ
とりふたりではなりませぬ。(改・卷四・37)

・たとえ、御上がりがたう御座るとも、かのひとなどのさうさ
をむになすもよしなく。(重改・卷六・24)

③ても

・そなたひとり御座つても、しきのあいさつのことところも御
さらぬにより。(改・卷一・9)

・そういったしても、十五六日めにはまいろうか。(重改・卷

五・11)

④で(継続的動作・状態)

・萬事をとりなしなされまして、わたくしのぶてうはうのあら
われんやうに、(改・卷・7)

・使者に逢つしやれて、御返事を被成る様に申入れまする。

(重改・卷七・2)

⑤で(原因・理由)

・かたからそうあらうとおもつて、あれほど申たれとも、
(改・卷五・43)

・又痛まして、出勤致被得ますまひかと(重改・卷二・3)

⑥ながら(逆接)

・心中に申たいこともえ申さいんで存じながら、無道なる仕合
せはづかしき海山に存じまする。(改・卷九・18)

・慥外ながら、申あげまする。(重改・卷七・4)

(C)グループ

①で(継続的な動作)

・ただいまこばやに御めしなされまして、御あがりなさるるや
うにたのみまする。(改・卷六・22)

・御返書を早う持たせて御座りませひ。(重改・卷五・13)

三、敬語の相関関係による陳述性

接統助詞と敬語を関連づけてみると、接統助詞別に敬語の現れ

方・出現頻度がある程度特定されていると思われる。

敬語として構成されている従属節の述語部に現れる諸要素（陳述性を内包している、打ち消し、推量など）を調べることににより、接続助詞別に現れる敬語の陳述性を測るようにすると（表5）のようである。

〈従属節の述語的部分の要素〉

〈表5〉

接続助詞	種類	て ¹	で ²	で ³	ながら	ても	とも	ば	から	ほどに	により	ども	けれど	が
用	言	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
使	役			○										○
受	身		○	○										
打ち消し					○	○	○	○	○	○	○	○		○
過	去							○	○	○	○	○		○
可	能											○		
完	了							○				○		
願	望												○	
意	志									○		○	○	○
推	量								○	○	○	○	○	○

「擬解新語」に現れる述語部の諸要素は、受身「る・らる」・使役「させる・せる」、打ち消し「ず・ぬ・ん」・可能「え」・完了「たり」・願望「たい」・意志「う」・推量「う・まい」等が用いられている。

渡辺実氏は、助動詞を「陳述」の度合に従って三つのグループ（第一類・第二類・第三類）に分けている。また、南不二男氏も「述語的部分の諸要素の現れから使役・受身形は「A段階」、打ち消し・過去形は「B段階」、意志・推量は「C段階」に現れる」と主張している。

このように述語部の諸要素は、前の〈表5〉で分かるように、敬語の出現率と相関関係をもっている。即ち、敬語の出現比率が高いグループには「意志・推量」など、陳述性が高いグループの諸要素が現れ、文を完結するはたらきをするのである。渡辺氏、南不二男氏の分類と敬語の出現比率による分類とは、その結果が一致していることが分かる。これは、接続助詞別の敬語の出現比率と述語部の諸要素とは強い相関関係があり、共存していることを表しているのである。すなわち、敬語の出現は陳述の度合に応じて出現するのである。

敬語がよく現れるグループである接続助詞「ほどに」・「により」・「が」・「けれども」・「ども」・「から」は述語部の諸要素としても、陳述性が高い段階である「う（よう）」・「まい」等の助動詞が現れる。このような強い相関関係と敬語の性格から

三つに分けることができる。

(A)丁寧語も尊敬語・謙讓語もあり付かないグループ

(B)尊敬語・謙讓語がよく付くグループ

(C)丁寧語と尊敬語・謙讓語がよく付くグループ

(A)・(B)・(C)に分けた各段階をみると(A)グループの方がもっとも事柄的で、(C)グループの方がもっとも陳述的である。(A)・(B)・(C)グループは、事柄的な面から陳述的な面への段階を示しているのである。接続助詞「が」・「けれども」・「ほどに」・「により」・「とも」・「から」等は、陳述性が高い節を導いているのである。

以上の結果から「陳述」の段階は、敬語を下位分類し、その出現比率を調べることににより、表し得ることが分かる。

このような観点から「文」を眺めてみると、様々な問題点が生じる。

I 接続助詞の置換関係

(1) 「ほどに」と「により」の場合

現代語において、原因・理由を表す接続助詞「から」と「^ほで」は、陳述の度合が異なるので、併用され、共存しているが、『読解新語』の「改修本」から出てくる「により」(原因・理由)は、その陳述の度合が「ほどに」(原因・理由)とほぼ同じなので、「原刊本」の「ほどに」に対して、「改修本」から入れ替わることができるといえる。

(例文)

・今度居取っても例にはなりまるするまい ほどに。(原・巻

三・7ウ)

・今度いどられましても禮にはなりまるするまいほどに。(改・

巻三・10)

・今日寛と坐らしやれましても禮にはなりまるするまいにより、

(重改・巻三・10)

(2) 「ども」と「けれども」の場合

接続の確定条件を表す接続助詞「ども」と「けれども」は、前の「表」で分かるように陳述の度合が同じく高いグループに属する。すなわち、陳述の面からみると同じ性格をもっていると言えるのである。

接続助詞「ども」は、「改修本」・「重刊本」において次第に数を増している「けれども」により、置き替えられ、併用されるようになったのである。

・書き立てにも御座ろうずれども、(原・巻五・11)

・ていたにも御座りませうけれども、(改・巻五・16ウ)

・手板にも御座りませうけれども、(重改・巻五・14)

(3) 「とも」と「ても」の場合

逆接の仮定を表す接続助詞「とも」と「ても」は、敬語の出現比率による陳述の段階がほぼ同じ段階を占めている。「とも」は、「原刊本」で14例がみられるが、「改修本」と「重刊本」では、

次第に「でも」に置き替えられている。

・若し何方著くとも、(原・巻一・14)

・もしいつかたえつきまして、(改・巻一・20)

・若何方え著まして、(重改・巻一・18)

以上のことからみると、接続助詞の置換に関して、陳述性の観点から、次のような法則性が考えられる。

イ、陳述の度合が異なる場合、接続助詞は共存する。「から」と「ので」

ロ、陳述の度合が同じグループに属する場合、接続助詞は共存しない傾向をもつ。「ほどに」と「により」・「ども」と

「けれども」・「とも」と「でも」

三本の『捷解新語』は、改修の際、接続助詞の置換が行われているが、それは同じ段階の「陳述性」を持つ接続助詞同志に置き替えられたものである。

国語史において、逆接を表す「とも」と「ども」は、近代語に新しく現れた「でも」と「けれども」に置き替えられているが、これらの置換には「陳述の度合」に応じて置き替えられているという法則性が見られるのである。

II 詞の敬語

時枝誠記氏は、『国語学原論』¹⁸で、聞き手への敬意の直接的表現である「ます」・「です」・「でございます」等の丁寧語以外の

尊敬語・謙讓語を「詞の敬語」と分類した。また、『捷解新語』にもよく用いられている尊敬を表す助動詞「る」・「らる」を話し手の判断情意を表すのではなく、概念内容を示すものであるから、「辞」の助詞・助動詞とは異なると主張している。

これに対して、辻村敏樹氏は、時枝氏が「詞の敬語は、話し手の敬意を表さない」と述べていることに対して「敬語の性格からみて、敬意を表しないとすれば、なぜにそれらは敬語と呼ばれるに値するか」と疑問をなげかけている。また、

敬意というような主体的なものを「辞」によってのみ表しうると考えるのは当然であるが、「る」・「らる」などが本来の意味から敬語としての表現に転用されたとき、それらは敬意を表す辞に転じたと見るべきだ。(講座日本語の文法2)

236 ページ)

と述べ、時枝氏の「詞の敬語」の規定に対して問題点を指摘している。

本稿では、敬語を丁寧語と尊敬語・謙讓語とに分けて、その出現比率を接続助詞別に調べてきたが、その結果(表1~5)として、時枝氏が主張する「詞の敬語」に属する尊敬語・謙讓語においても、出現率は、丁寧語より落ちているが、接続助詞別に現れる陳述性の順序は、丁寧語とほぼ同じ結果が出ている。すなわち、「辞の敬語」である丁寧語として、陳述性が高いグループである「が」・「けれども」・「ども」・「により」・「ほどに」

等は尊敬語・謙讓語の出現においても同じく高いグループを占めているのである。

ここで、「詞の敬語」と言われている尊敬語・謙讓語の場合も陳述性の度合に応じて出現していると思われる。

このようなことから、時枝氏の「詞の敬語」に属する尊敬語・謙讓語は二つの側面から見る事ができる。

- (イ) 尊敬語・謙讓語も陳述性の度合に応じて出現している。
(ロ) 「捷解新語」における尊敬語・謙讓語が丁寧な意味で用いられていること。

(ロ)については、宮地裕氏が「捷解新語」にもよく用いられている謙讓語「存じる」・「致す」・などを丁寧語と分類し、「話手の敬意的配慮が直接だれかに向かう。」(講座国語史5・敬語史 419ページ)と述べている。以上のことから、時枝氏の尊敬論における「詞の敬語」と「辞の敬語」との分類は、本稿の陳述性に連続性があるという観点からみると、「より詞的」と「より辞的」という表現がふさわしいと思う。

Ⅲ 改修における丁寧化

「捷解新語」は1676年「原刊本」が刊行されて以来、1748年「改修本」と1781年「重刊改修本」等の改修が行われた。

通訳官の手による改修は、内容的に「原刊本」をほとんど踏襲

しており、約百年を経た日本語が対照できるという点から、日本語研究においても、その資料的価値が高いと言われている¹⁶⁾。また、「改修本」と「重刊本」には、敬語がよく現れるようになる特徴がある。

特に「丁寧語」を中心に発達した「改修本」と「重刊本」は当時成熟しつつあった格式に応じた丁寧さが特色である「武士言葉」から、影響されたものと考えられる。それは、「原刊本」の成立時期が刊行より約四十年前であるということを考えあわせると、時期的にも首肯できるものである。

このように「改修本」と「重刊本」に敬語がよく付くようになったと言うことは、文体的に、より丁寧化されたと言うことと、文法的に、文の構造において陳述的な面が高くなったことを示すものである。

四、おわりに

以上、文の成立に深い関わりをもつ「陳述性」というものを、従属節の述語を中心に、敬語を下位分類する方法によって、構文論的な考察をこころみた。

三本(「原刊本」・「改修本」・「重刊本」)の「捷解新語」を資料として敬語を調べた結果、全体的に二つのことが言える。

(1) 一般的な傾向

三本の「捷解新語」を通して「陳述」の度合に応じた敬語の出

現率が認められる。つまり、陳述性が高いグループの従属節は、敬語の出現率が高くなる。これは現代語と比較してみても同じ結果が出ていることから、時代を通した共通の文法的傾向と言える。

(2) (三本の「捷解新語」を通して) 合致しない傾向

三本の「捷解新語」を比較してみると、文体的に「原刊本」より、「改修本」、「重刊本」において丁寧化がさらに進んでいる。それは「捷解新語」が役人のための実用的な日本語教科書であったことを考えると、当時、成熟しつつあった「武士言葉」というものに改修の際、かなり影響されたものと考えられる。

(韓国韓南大学校 非常勤講師)

《資料》

- ・「三本対照捷解新語」(京都大学文学部国語学国文学研究室編・昭47)
- ・「改修捷解新語」(京都大学文学部国語学国文学研究室編・昭62)

注

- 注1 「国語学原論」(時枝誠記・岩波書店・昭53・32版)
- 注2 「日本語教育事典」(日本語教育学会編・大修館・昭37・1版)
- 注3 「国語構文論」(渡辺実・塙書房昭63・7版)
- 注4 「現代日本語の構造」(南不二男・大修館・昭61・7版)
- 注5 「国語と国文学」(「からとのではどう違うか」・水野賢・昭26)
- 注6 「講座日本語の文法2」(「詞と辞の分類と敬語」・明治書院・昭42)

注7 「講座国語史・敬語史」(「現代の敬語」宮地裕・昭46)

注8 「季刊文学・語学」(大友信二・「外国資料中国・朝鮮」昭43・6)

研究室受贈圖書雑誌目録(三)

- 国語と教育(長崎大学) 第十四号、第十五号
- 国文 お茶の水女子大学 第七十一号、第七十二号、第七十三号
- 国文学(関西大学) 第六十六号、第六十七号
- 国文学会誌(京都教育大学国文学会) 第二十三号
- 国文学研究(早稲田大学) 第百集、第百一集、第百二集
- 国文学研究資料館紀要 第十六号
- 国文学研究資料館調査研究報告 第十一号
- 国文学研究ノート(神戸大学) 第二十四号
- 国文学攷(広島大学) 第百二十三号、第百二十四号、第百二十五号
- 国文学雑誌(藤女子大学・藤女子短期大学) 第四十四号、第四十五号
- 国文学論考(都留文科大学) 第二十六号
- 国文学論集(山梨大学教育学部) 第二十六集
- 国文学研究(香川大学国文学会) 第十四号、第十五号
- 国文 研究と教育(奈良教育大学) 第十三号
- 国文稿(京都橘女子大学) 第十七号
- 国文鶴見(鶴見大学日本文学会) 第二十四号